

村上春樹《東京奇譚集》的世界與環境： 探討各短篇之間的關聯

葉菱

淡江大學日本語文學系副教授

摘要

《東京奇譚集》收錄的五個短篇中，敘述者的人稱、主人公的設定充滿了多樣性。作品中的“奇譚”與人心中的各種問題息息相關。而影響個人內心的外部因素可以歸結於標題的“東京”。

“偶然的旅人”描繪了超越“東京”的普遍社會環境。“哈納雷灣”中的“自然原理”出現在主人公生活的“東京”。“不管是哪裡，只要能找到那個的地方”中“東京”代表高度資本主義社會。“日日移動的腎形石”中可以看出超越日常生活的家庭環境。“品川猴”的“東京”地底象徵了心靈深層。

每個短篇顯示出不同的外部環境。但是透過第三人稱的遙遠視角，可以明顯看出主人公的內在和外在環境的相互作用。

關鍵詞：環境、社會、自然、東京、敘述者

受理日期：2023年3月10日

通過日期：2023年5月26日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202306_(40).0008

**The World and the Environment in "Blind Willow, Sleeping
Woman" of Haruki Murakami :
Focusing on the Connection of Each Short Story**

Yeh, Ling

Associate Professor, Department of Japanese, Tamkang University

Abstract

In the five short stories included in "Blind Willow, Sleeping Woman", the character of the narrator and the setting of the main character show diversity. As many previous studies have pointed out, "story" is related to the internal problems of the mind. On the other hand, it is thought that the external factors that affect the inner side of the individual are attributed to the title "Tokyo".

In "Chance Traveler", a universal social environment that transcends "Tokyo" is depicted. The "natural order" in "Hanalei Bay", is manifested in "Tokyo," where the protagonist lives. In "Where I'm Likely to Find It", we see the highly capitalistic society represented by "Tokyo. In "The Kidney-Shaped Stone That Moves Every Day", we can see a family environment that surpasses daily life. In "A Shinagawa Monkey", Tokyo, the underground is seen as a symbol of the depths of the mind.

The external environment presented in each short story is different. However, through the distant perspective of the third person, the interaction between the protagonist's inner world and the external environment is made present.

Keywords: Environment, society, nature, Tokyo, narrator

村上春樹『東京奇譚集』における世界と環境 —各短編の繋がりを中心に—

葉 菱

淡江大学日本語学科准教授

要旨

『東京奇譚集』に収録された五つの短編において、語り手の人称、主人公の設定には多様性が示されている。多くの先行研究が指摘したように、「奇譚」は心の内面の諸問題に関わるものである。一方、個人の内面に影響する外的要因は、題名の「東京」に帰結していると考えられる。

「偶然の旅人」では、「東京」を超えた普遍的な社会環境が描かれている。「ハナレイ・ベイ」における「自然の摂理」は、主人公が生活する「東京」で現れている。「どこであれそれが見つかりそうな場所で」では、「東京」が代表する高度的な資本主義社会が見られる。

「日々移動する腎臓のかたちをした石」に日常生活を凌駕した家庭環境は窺える。「品川猿」における「東京」は地下が心の深層の象徴だと看做される。

各短編が示した外的環境はいずれも異なっている。しかし、三人称という遠い視点を通して、主人公の内面と外的環境との相互作用が現前している。

キーワード：環境、社会、自然、東京、語り

村上春樹『東京奇譚集』における世界と環境 —各短編の繋がりを中心に—

葉菱

淡江大学日本語学科准教授

1. はじめに

村上春樹の『東京奇譚集』（2005年・新潮社）は、文芸誌『新潮』2005年3月から6月にかけての連作「偶然の旅人」、「ハナレイ・ベイ」、「どこであれそれが見つかりそうな場所で」、「日々移動する腎臓のかたちをした石」に、書き下ろしの「品川猿」によって成り立った短編小説集である。各短編の主人公に直接的な繋がりは見当たらない一方、「都市生活者を巡る怪異譚」が『東京奇譚集』に収録された各短編を貫く創作モチーフだと村上春樹は説明している¹。要するに、作品の題名通り「都市＝東京」、「怪異譚＝奇譚」は『東京奇譚集』の共通的な要素だと思われる。

「怪異譚＝奇譚」とう超自然的な力について、ジェイ・ルービン は次のように論じている。

そうした超自然的な力は登場人物たちが心理面で求めていることのメタファーとなり、連作の主題、つまり心の癒しへの入り口をもたらしている。²

ジェイ・ルービン氏の論点によると、「怪異譚＝奇譚」は『東京奇譚集』の主題である心の癒しをもたらすきっかけだという。また、主人公たちが遭った「奇譚」について、重岡徹は「リアリズムを超えた『奇譚』を導入部として、いわばただの人の場所に降りたち、

¹ 村上春樹（2014）『女のいない男たち』文藝春秋 p6

² ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳（2006）『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社 p377

彼らの内なる小さな悪を描こうとしている」³と提示している。自分の内面にある「小さな悪」に気づいたきっかけは「奇譚」だという。このように、村上春樹がいう「怪異譚」は、『東京奇譚集』の主人公である「都市生活者」が自分の内面に潜り込むきっかけだと考えられる。

一方、「ハナレイ・ベイ」に言及された「戦争」について、宮脇俊文は「警官がこの話を始めたのは、サチの心の痛みを和らげるためであったことは言うまでもないが、同時に戦争による死のやるせなさを強調している」⁴と述べて、「心の痛み」に注目し戦争を批判している。また、藪添隆一は「人は味方と敵に分かれて戦争する。それぞれの「側」には大義、言い分がある。戦死は大義に殉じた死とみなされる。(中略) サカタは母(自然)を愛しているのだ」⁵と述べて、「戦争」を出発点として人間内面の「愛と憎しみ」について論述している。このように、「戦争」という社会的要因と「心の痛み、愛憎」といった人間の感情とは相互に関わっていると論じられている。

以上の引用文をまとめてみると、『東京奇譚集』における人間の内面の諸問題を研究する焦点は多く存在している。「東京」在住の主人公が「奇譚」を通して自分の内面に収めきれない感情に向き合うと思われる。一方、「戦争」という外的要因が心の深層に作用しているとも指摘されている。

しかし、主人公が向き合えない心の諸問題と在住する「東京」との関係や「東京」での奇譚が生成する原因といった個人の内面に影響する外的要因について、さらなる究明の余地が残る。また、「ハナレイ・ベイ」の「戦争」以外、他の諸短編において心の深層に作用

³ 重岡徹(2006)「村上春樹『東京奇譚集』論」『別府大学国語国文学』(48) 別府大学国語国文学会 p35

⁴ 宮脇俊文(2021)「村上春樹『ハナレイ・ベイ』と戦後日本人の歴史認識」『成蹊大学経済経営論集』52(1) 成蹊大学経済経営学会 p34

⁵ 藪添隆一(2019)「村上春樹『ハナレイ・ベイ』—臨床心理学的一考察—」『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要』(57) 京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部 p138

する社会的要因も再考する必要がある。本稿では、主人公が生活している世界と奇譚を生み出す環境という外的要因からアプローチし、『東京奇譚集』における各短編の繋がりを探る。

2. 『東京奇譚集』に描かれた世界と環境

2018年に映画化された「ハナレイ・ベイ」について、藪添氏は以下のように述べている。

なによりもハワイ・カウアイ島ハナレイ・ベイの自然と現地の人々が美しい。(中略)自然と人を受け入れることによって服喪の作業がなされていくことを物語るという意味で、原作の本質に映画は到達している。⁶

「ハナレイ・ベイ」の映画化により、自然と登場人物の服喪との関係が再び注目された。藪添氏が指摘したように、ハナレイ・ベイの「自然環境」がサチの服喪に影響している。一方、「サチは東京の街でずんぐりに出会った」(p76)という結末のように、「ハナレイ・ベイ」を論じる際に、「東京」という人為的に作り上げられた「社会環境」も無視できないのであろう。

本節では、自然環境や社会環境といった外的要素に注目して、主人公が生活する世界、及び奇譚を生み出す環境と「東京」との関係を考察する。また、前述したジェイ・ルービン氏の論点を援用して、「奇譚」を「心を癒やす出来事」とする。

2.1 偶然の旅人

主人公の「彼」は、「住まいは東京の西、多摩川の近くにある。41歳でゲイである」(p16)とされている。「自分がゲイである事実をとくに隠してはいない」(p16)とあるように、「彼」は自分の性的傾向

⁶ 藪添隆一(2019)「村上春樹『ハナレイ・ベイ』—臨床心理学的一考察—」『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要』(57) 京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部 p137

を受け入れている。大学に入って、自分がゲイであることに気づいたことについて、「彼」は次のように語る。

僕の中でどうしても納得のいかなかったいくつかの疑問が、それですっと腑に落ちた。なるほどそういうわけだったのかってね。それでずいぶんらくになれた。曇っていた眺めが、一瞬のうちに開けたみたいに（中略）そうすることで僕はやっと本来の自分に帰ることができたんだ。自然なかたちの自分自身に（pp35-36）

自分がゲイであるという事実は自分に対して納得できなかった疑問を解いてくれたと「彼」はいう。その結果、答えを見つけて心がラクになった「彼」は「本来の自分」として生きることになったのである。一方、その事実が知られたら、周りの反応は次の通りである。

それによって彼は何人かの親しい友人を失ったし、両親とのあいだもかなりぎくしゃくすることになった（中略）彼がゲイであることが相手（「彼」の姉の結婚相手・論者注）の家族に知れたために、間近に控えていた結婚話が暗礁に乗り上げそうになった（p19）

自分がゲイであることが明らかになったことで、「彼」は友人や家族との関係が悪化した。つまり、「彼」は、ゲイという性的傾向を受け入れることのできない人が多くいる環境にいたのである。特に「彼」の姉の結婚相手は「彼の性的傾向をまるで不治の伝染病のように扱った」（p32）人物であり、ゲイに対する偏見や差別を露骨に表現している。

このような環境に置かれた「彼」は、ゲイという「本来の自分」を理解したとしても、次のような不安を持っている。

短いあいだに僕の人生はがらっと変ってしまったんだ。そこから振り落とされないように、なんとかしがみついているのがやっとだった。すごく怯えていたし、怖くてたまらなかった。そんなとき、他人に説明なんてできない。世界からずり落ちていくような気がした。だから僕はただわかってもらいたかったんだ。そしてしっかり抱きしめてもらいたかった (pp36-37)

引用文のように、周りに理解されない限り「彼」が「本来の自分」に戻ったとしても、自分らしく生きることは到底考えられない。自分自身を受け入れても、周りに理解されず怯えていた「彼」が抱えている葛藤は容易に想像されよう。ゲイに対する偏見や差別に満ちた社会環境は「彼」を苦しめていると言えよう。

結婚が中止になりそうで「家族の中でもっとも親しかった、二つ年上の姉」(p19)の精神状態を示す箇所は次の通りである。

何とか相手の両親を説得して、結婚にこぎ着けることはできたのだが、姉はその騒ぎで半ばノイローゼ状態になり、彼に対してひどく腹を立てた。どうしてわざわざこんな微妙な時期を選んで波風を立てなくてはならなかったのか、と弟を声高に責めた (p19)

「いちいち説明しなくても、わかってもらいたかったんだと思う。とくに姉さんにはさ」(p36)という「彼」は、どうしても姉に自分を理解し支えてほしい。余裕のない姉に構ってもらえなかった「彼」が感じた孤独や不安は想像されよう。

以上のように、東京在住の都市生活者である「彼」は社会にも家族にも認められず、孤独感が強まる一方だと考えられる。また、ゲイへの偏見や差別は、題名の「東京」という都市に関係なく社会全体的な問題であろう。こうして、「偶然の旅人」における「孤独」は、

80年代の村上春樹作品に満ちた「都市生活者の孤独感」⁷とは異なって、社会的環境に衝突する「本当の自分」をめぐる葛藤によるものだと言えよう。

そして、「彼」が「姉と仲直りできたことで、僕の人生はひとつ前に進めたような気がします」(p40)というように、「彼」にとっての「奇譚＝心を癒やす出来事」は「姉と和解して抱き合うこと」(p40)だと見做されよう。

『東京奇譚集』における「奇譚」の発生について、葉菱は以下のように論じている。

自分の全てを「受容」した人において、心の葛藤を打開する契機として「奇譚」と思われる出来事は目の前に現れる。しかし、それは単なる偶然ではなくて、「共時性」という因果関係を超越した現象による結果だと考えられる。⁸

因果関係で説明しきれない「奇譚」の発生は、「共時性」という人間が心の中に何かを強く求める結果だという論点である。つまり、「奇譚」は、「彼」がいう「ひょっとして実はとてもありふれた現象」(p41)で、東京の生活者にとどまらず、「心の癒し」を求める人の周りに起こるものだと言えよう。

2.2 ハナレイ・ベイ

主人公のサチは「六本木に自分の小さなピアノ・バーを開いた」(p65)という「都市生活者」である。彼女は「十九歳のときに、ハナレイ湾で大きな鮫に襲われて死んだ」(p45)息子を弔うように、「ハナレイの町を訪れ(中略)息子の命日の少し前にやってきて、三週間ばかり滞在した」(pp53-54)のである。

⁷ 例えば、川本三郎(2006)『村上春樹論集成』若草書房 p46では、「都市のなかで個人個人は無意味な孤独を強いられている」と述べられて、人間が都市から感じた孤独は注目され、都市生活者としての「孤独」について論じられている。

⁸ 葉菱(2014)「村上春樹『東京奇譚集』論一『共時性』・『受容』と奇譚の生成一」『国語国文学研究』(49) 熊本大学文学部国語国文学会 p238

その「十年以上続い」(p54) た息子の死を弔うような儀式について、藪添隆一は以下のように述べている。

「くりかえし」は自然の摂理である。人は「くりかえすこと」で自然に近づき、自然と調和していくことができる。自然との調和は受け入れ難い別れの苦痛を癒していくだろう。⁹

十年以上息子の命日にハナレイの町を訪れるという「くりかえし」は、サチが息子の死という「受け入れ難い別れの苦痛」を癒やす手段だと考えられる。

作品の冒頭に、「鮫に右脚を食いちぎられ、そのショックで溺れ死んだのだ。だから正式な死因は溺死ということになっている。(中略)水を大量に飲んで溺死してしまったわけだ」(p45) とあるように、「死」という別れは現前している。また、死の意味について、当地の警官はサチに次のように言う。

ここカウアイ島では、自然がしばしば人の命を奪います。ごらんのようにここの自然はまことに美しいものですが、同時に時として荒々しく、致命的なものともなります。私たちはそういう可能性とともに、ここで生活しています。息子さんのことはとてもお気の毒に思います。心から同情します。しかしどうか今回のことで、この私たちの島を恨んだり、憎んだりしないでいただきたいのです。(p49)

警官が言うように、カウアイ島では自然が人の命を奪う一方、住民の生活を支えるものでもある。そこに住んでいる人間は、自然のあらゆる「可能性」を受け入れて、自然の一部としてカウアイ島で

⁹ 藪添隆一 (2019)「村上春樹『ハナレイ・ベイ』—臨床心理学的一考察—」『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要』(57) 京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部 p138

生活しているという。このような人間と自然との共存という立場から見ると、「恨み」、「憎み」といった人間の感情で「島」に対する価値判断するのはしてはならないことであろう。さらに警官は次のように言う。

大義がどうであれ、戦争における死は、それぞれの側にある怒りや憎しみによってもたらされたものです。でも自然はそうではない。自然には側のようなものはありません。あなたにとっては本当につらい体験だと思いますが、できることならそう考えてみてください。息子さんは大義や怒りや憎しみなんかとは無縁に、自然の循環の中に戻っていったのだと (p50)

この発言において、「自然の循環に戻るという死」の対比として「戦争における死」が持ち出されている。恨んだり憎んだりしてはならない「島＝自然」に対して、「戦争における死」にある「怒りや憎しみ」の存在は認められる。息子の死が「自然の循環の中に戻る」という自然の理に属するもので、「戦争における死」による「怒りや憎しみ」に無縁なものだと見做される。

「自然の可能性」の一部としての息子の死を受け入れないサチは、息子の命日になると、東京からハナレイの町に訪れるようになる。このように、サチの苦痛は「東京」というより「自然の循環」に関わるものだと言えよう。

一方、サチをめぐる「奇譚＝心を癒やす出来事」は、次の箇所の通りである。

彼女にわかるのは、何はともあれ自分がこの島を受け入れなくてはならないということだけだった。あの日系の警官が静かな声で示唆したように、私はここにあるものをそのとおりに受け入れなくてはならないのだ。公平であれ不公平であれ、資格みたいなものがあるにせよないにせよ、あるがままに。サチは翌

朝、健康な一人の中年女性として目を覚ました。(p76)

「島＝自然のあらゆる可能性」を受け入れたサチは、「健康な一人の中年女性」となった。要するに、「自然の循環の中に戻る死」を受け入れたサチは、息子の死という苦痛を乗り越える可能性を手に入れたのではなかろうか。

そして、サチは「東京の街」(p76)でカウアイ島で出会った息子を思い出させる日本人の若者に再会した。別れる際に彼の「おばさんも頑張ってください」(p79)という言葉に「ハナレイ・ベイで鮫に食われなくてほんとによかったよね」(p79)と返事したサチは、彼のことに息子の姿を重ねたのではなかろうか。さらに言えば、「東京」という身近な場所でサチは「自然の循環」の一部として新しい生活を迎えると考えられる。

2.3 どこであれそれが見つかりそうな場所で

他の四つの短編とは異なって、本作は一人称語りによって成立した作品である。「奇妙な探偵小説」¹⁰と言われるように、「私」が語るのは、失踪した胡桃沢氏を探すという依頼である。作中に「私」をめぐる情報が決して多いとは言えない。最も題名の「東京」に関わるのは、「品川区のマンション」(p87)に住んでいる胡桃沢夫妻である。

証券会社メリルリンチのトレーダーとして、品川区の高層マンションのユニットを二つ所有している胡桃沢氏は、「24階と26階を結ぶ階段の途中で、痕跡も残さず、私たちの前から姿を消してしまった(中略)暴力犯罪の形跡が見あたらない」(p92)という形で失踪したのである。この超現実的な消え方について、重岡徹は次のように論じている。

あたかも魔法の鏡を通過して胡桃沢が「あちらの世界」に移

¹⁰ ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳(2006)『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社 p378

動したのかもしれない、と暗示させるような表現である。(中略)
しかし胡桃沢は「楽観的」な「向こう側」の世界に、ある意味
では実際に一時的に移動していたのだ、というふうに作者はこ
の作品のラストを締めくくっているのである。¹¹

重岡氏が指摘したように、消えてから「仙台駅の待合所のベンチ
に寝ているところを保護された」(p116)までの二十日間、胡桃沢氏
は鏡の向こう側という「楽観的な世界」にいたと考えられる。一方、
「不安神経症のお母さんと、アイスピックみたいなヒールの靴を履
いた奥さんと、メリルリンチに囲まれた美しい三角形の世界」(p119)
という「私」がいう皮肉があるように、胡桃沢氏をめぐる現実世界
は決して美しいものではない。

「^{ただ}無料のものは決して信用するな、と夫は常々申しておりました」
(p95)という胡桃沢夫人の言葉に、「私」は「一般的なことを申し
上げれば、ご主人のおっしゃるとおりです(中略)この高度に発展
した資本主義の世界にあっては、ただのものは簡単に信用してはな
らない。実にそのとおりです」(pp95-96)という。メリルリンチに
勤める胡桃沢氏の、利益追求が最優先とされる高度な資本主義社会
に感じた不信やストレスは、二人の会話から伺えよう。

また、資本主義社会について、宮脇俊文は以下のように述べてい
る。

この高度に資本主義化された社会の現実には、ある種のクロー
ズド・サーキットのようなものであり、内実は真実を避け、表
面的な成功だけを追いかけている社会なのだ。¹²

品川区の高層マンションを所有するという表面的な成功を手に入

¹¹ 重岡徹(2006)「村上春樹『東京奇譚集』論」『別府大学国語国文学』(48) 別府大学国語国文学会 p28

¹² 宮脇俊文(2021)「村上春樹『ハナレイ・ベイ』と戦後日本人の歴史認識」『成蹊大学経済経営論集』52(1) 成蹊大学経済経営学会 p48

れた胡桃沢氏は、真実を避ける資本主義という社会環境に悩まされて、精神状態がまさにクローズド・サーキットに陥ってしまったのであろう。

以上のように、品川区の高層マンションが位置する「東京」が代表する高度な資本主義社会は、真実を避けて表面的な成功を追求する利益主義的な価値観が根づいた環境であり、胡桃沢氏が「楽観的な向こう側」に逃げようとする一因でもあろう。

胡桃沢氏をめぐる「奇譚」は言うまでもなく「向こう側」に移動した失踪事件であろう。この事件を通して、胡桃沢氏が手に入れた「癒やし」について考察する。

「家を出たときと同じ服装です。二十日ぶんの髭がのびて、体重は 10 キロばかり減っていました。眼鏡はどこかでなくしたようです」(p117) とあるように、仙台駅で発見された胡桃沢氏には最大な変化が 10 キロも減った体重であろう。「結婚前は 62 キロしかなかったのですが、10 年のあいだに少しばかり肉がつきました」(p90) とあるように、「向こう側」から戻ってきた胡桃沢氏は結婚前にリフレッシュしたと考えられる。

「黒のハイヒールがよく似合っていた。そのかかとは致命的な凶器のようにとがっている」(p86)、「そしてハイヒールの音を攻撃的に響かせながら、階段を上って消えていった。彼女の姿が見えなくなったあとも、そのヒールの音は不吉な布告を打ちつける釘みたいな感じであたりに響いていたが、やがてそれも消え、沈黙がやってきた」(p99) とあるように、胡桃沢夫人のハイヒールについての「私」の描写は印象的である。

作中に胡桃沢夫人の性格への描写は見当たらない一方、致命的、攻撃的、不吉と形容されたハイヒールは、胡桃沢夫人のメタファーだと見做される。「致命的、攻撃的」で近寄りがたい存在として、「不吉」な音がする胡桃沢夫人は、「不安神経症のお母さん」(p119) と同じように不安定な女性だと想像されよう。

こうして、胡桃沢氏が品川区のマンションで失踪したのは、胡桃

沢夫人との日常生活から離脱する「奇譚＝心を癒やす出来事」だと言えよう。

2.4 日々移動する腎臓のかたちをした石

主人公の淳平は「十六歳のとき」(p123) 父親に「男が一生に出会う中で、本当に意味を持つ女は三人しかいない。それより多くもないし、少なくもない」(p123) と言われた。それ以来、「父親の持ち出した『三人の女』説だけは、根拠の十分な説明も与えられないまま、一種の強迫観念となって彼の人生につきまとっていた」(p126) とあるように、淳平の人生は「血を分けた親子ではあったが、親しく膝を交えて話をするようなうちとけた間柄」(p123) ではない父親の言葉に影響されている。

「父親は三人の女に既に巡り会ったのだろうか？母親はそのうちの一人なのか？だとしたら、あとの二人とのあいだにはいったい何が起こったのか？」(p124) という疑問を心に持っていたとしても、淳平は「父の呪い」(p125) から逃れることができない。

「十八歳のときに家を離れ、東京の大学に入り、それ以来何人かの女性と知り合い、つきあうことになった」(p124) 淳平は、相変わらず「父親の呪い」にまといわれ「新しい女性と知り合うたびに、自らに問いかけること」(p124) をするようになった。「この女は自分にとって本当に意味を持つ相手なのだろうか」(p124) と不安を感じた淳平は、女性との穏やかな関係を維持できない人間となった。

そして、「大学を出るころに父親と激しい口論をして、そのまま一切の交際を絶っていた」(pp125-126) とあるように、東京の大学に進学しても父親との関係を断っても、淳平は「父親の呪い」から解放されない。

以上のように、「父親の呪い」というほど「三人の女」説にとわれた淳平の苦悩が容易に想像されよう。淳平が女性との関係に抱く不安は、同時に自分自身への疑念でもあろう。東京の大学に進学するように生活環境が変わっても淳平は依然として「父親の呪い」から逃れることができない。家庭環境が淳平にどれほどの影響を与えて

いるかは言うまでもないのであろう。

一方、小説家である淳平が書き上げた、本作と同じ題名の小説「日々移動する腎臓のかたちをした石」（以下「淳平の小説」と称する）は以下のような内容である。

主人公である三十代前半の女医が旅行中に拾った「本物の腎臓そのまま」（p142）の「腎臓石」（p124）は、彼女を「静かに揺さぶり続ける」（p145）という。「彼女の生活の多くの部分を支配」（p146）した「腎臓石」は「外部からやってきた物体ではない」（p146）とされる。そして、「ポイントは彼女自身の内部にある何かなのだ。彼女の中のその何かが、腎臓のかたちをした黒い石を活性化している。そしてそれは彼女に、何かしらの具体的行動をとることを求めている。そのための信号を送り続けている」（p147）とあるように、「腎臓石」は女医との交流を図る。物語の最後に、「人生をもう一度新しく生き直そうと決心」（pp147-148）した女医は「東京湾フェリーに乗り、デッキから腎臓石を海に捨てる」（p147）ことにした。しかし、「翌朝病院に出勤したとき、その石は机の上で彼女を待っている。それはびたりと所定の位置に収まっている」（p148）という結末で「淳平の小説」が完結している。

村上春樹の「自己表現をやりたいなら小説を書けばいいと思う」¹³という発言が示唆したように、淳平は「淳平の小説」で「自己表現」を図ると考えられる。捨てようとしても所定の位置に戻ってくる「腎臓石」（p142）は、淳平につきまとう「父親の呪い」の象徴だと言えよう。そして、日常生活を離れた東京湾に「腎臓石」を捨てようとしても無駄な努力になってしまったのは、恰も実家を離れて東京という新しい場所で新生活を始めた淳平の経験であらう。

一方、「彼女の中のその何かが、腎臓のかたちをした黒い石を活性化している」（p147）とのように、心の中にある「何か」が活性化された淳平は「淳平の小説」の結末と同様に「父親の呪い」につきま

¹³ 村上春樹・柴田元幸（2000）『翻訳夜話』文藝春秋 p36

とわれている。このように、「淳平の小説」を書き上げた淳平は、「自己表現」ができて「父親の呪い」から逃れることができないと言えよう。

そして、淳平にとっての「奇譚＝心を癒やす出来事」は次のように描写されている。

キリエは彼にとって「本当に意味を持つ」女性の一人だったのだ。ストライク・ツー。残りはあと一人ということになる。しかし彼の中にはもう恐怖はない。大事なものは数じゃない。カウントダウンには何の意味もない。大事なものは誰か一人をそっくり受容しようという気持ちなんだ、と彼は理解する。(p155)

キリエという女性を受け入れた淳平は、女性の数、カウントダウンの無意味さを理解した。それは淳平が「父親の呪い」から解放されたと見做されよう。そして、本作は次のような一説で締めくくられている。

同じころ、女医の机の上からは、腎臓のかたちをした黒い石が姿を消している。彼女はある朝、その石がもうそこに存在していないことに気づく。それは二度と戻ってはこないはずだ。彼女にはそれがわかる。(p156)

「腎臓石」が消えて二度と戻ってこないというのは、純平が「父親の呪い」から解放されたことの象徴だと考えられる。「彼の書いた短編小説は文芸誌の二月号に掲載された」(p148)とあるように、既に完成し雑誌に掲載された「淳平の小説」は、結末が変わるはずはない。「腎臓石」が存在しないことに気づいた女医と同じように、淳平は自分が「父親の呪い」から解放されたことに理解したのであろう。このように、「淳平の小説」の変化は淳平の深層心理のメタファーだと見做されよう。

2.5 品川猿

「品川区在住」(p167)の主人公・みずきは「ときどき自分の名前が思い出せなくなっ」(p159)て悩まされ、総合病院に治療を受けようとした。しかし、「ときどき自分の名前が思い出せなくなるくらい、べつにいいじゃありませんか」(p166)と「関心と同情を欠いた」(p166)という医師に相手にされなかったみずきは、「普通なら見逃してしまいそうなくらい小さな記事」(p166)を見て、「週に一度」(p187)というペースで区役所で開かれた「心の悩み相談室」(p166)に通うようになった。

カウンセラーの坂木哲子がみずきに対する態度は次の通りである。

みずきの話に熱心に耳を傾け、ときどき何かを考えるようにぎゅっと顔をしかめるのをべつにすれば、春の夕暮れどきの月のようなほんのりとした微笑みを、終始口もとに浮かべていた。
(p169)

「家族とはこれまで特に問題もなく、まずまず良好な関係を保ってきた(中略)現在送っている結婚生活にも、異議を申し立てるべき点はこれとって見あたらない(中略)職場での人間関係にもとりたてて問題はない」(pp170-171)と思うみずきは、「考えてみればこれまで、私の話にこれくらい真剣に耳を傾けてくれた人はほかにいなかったような気がする」(p172)という。

家族関係、結婚生活、職場の人間関係にとりわけ悩むことを感じていないが、熱心に話を聞いて微笑んでくれた坂木哲子のカウンセリングを受けたみずきは、自分を真剣に理解しようとする相手がいないと気づいた。

そして、坂木哲子の協力により、みずきの「どうして名前忘れが起こるかという、その原因」(p189)は特定された。それは「猿があなたのところから名札を盗んでいった」(p194)からだとされている。

「私はあなたの名前忘れの原因をみつけたと思うわ」(p190)という

坂木哲子がみずきを猿のところに連れていくのは次のように描かれている。

みずきは坂木哲子に導かれるままに、面談にあてられている部屋を出て、廊下を歩き、エレベーターに乗った。そして地下に降りた。地下の人気のない長い廊下を歩き、いちばん奥にある部屋のドアの前に立って、坂木哲子はドアをノックした。

(p192-193)

面談の部屋に猿を連れてきて原因を突き止めるのではなく、あえてみずきを導いて「人気のない地下」に降りたのである。そして、「部屋の奥に、もうひとつのドアがあり、桜田はそのドアを開けた。(中略) 小さな倉庫のような部屋だった。家具はない。ただ小さな椅子がひとつあり、その椅子に猿が一匹座っていた」(p194) とあるように、みずきはようやく自分の「名前忘れ」の原因である猿に直面した。

人気のない地下の廊下の一番奥にある部屋に入って、その奥にもう一つの部屋にいるという設定は、村上春樹がいう「無意識の世界」を想起される。

地下階のなかには隠れた別の空間もある。それは入るのが難しい場所です。というのも、簡単には見つからない秘密の扉から入っていくことになるからです。(中略) それはちょうど、夢のようなものです。無意識の世界の形態のようなね。¹⁴

村上春樹がいう「無意識の世界」へのルートは、まさにみずきが猿のいる場所に行く過程と同様であろう。地下にいる人間の言葉がしゃべる猿という設定について、黒古一夫は「奇想天外（オカルト

¹⁴ 村上春樹 (2012) 『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』 文藝春秋 p165

的)過ぎて、この短編からリアリティーを奪う原因」¹⁵と論じている。それは確かに「奇譚」の範疇を遥かに超えた超現実的な設定である。しかし、カウントダウンを受けたみずきは自らの「無意識の世界」に到達したと解釈されよう。こうして、品川区という現実世界の地下はみずきの「無意識の世界」の象徴だと見做されよう。

そして、「無意識の世界」を象徴する地下の部屋でみずきが手に入れた「心の癒し」について、堀口真利子は次のように述べている。

みずきが自らの内に抱え込んできた心の闇、つまり、嫌な事から目をそらせ「防衛的な姿勢」を取ってきたみずきが、自ら「地下」へと降りて行き、猿＝自分自身と〈対話〉することで自己のアイデンティティを獲得することが出来たのである。¹⁶

「私にもずっとわかっていました。でもそれを見ないようにして、今まで生きてきたんです。目をふさいで、耳をふさいで。お猿さんは正直に話をしているだけです」(p207)というみずきの告白のように、猿との対話を通してみずきは自分の「心の闇」を直視するようになった。「彼女はこれから再びその名前とともに生活していくことになる。ものごとはうまく運ぶかもしれないし、運ばないかもしれない。しかしとにかくそれがほかならぬ彼女の名前であり、ほかに名前はないのだ」(p210)という結末のように、名前を取り戻したみずきは「名前に付帯しているネガティブな要素」(p202)とともに生きていく勇気を手に入れたと考えられる。

2.6 まとめ

以上のように、『東京奇譚集』の主人公が生活している世界、奇譚を生み出した環境を明らかにした。

「偶然の旅人」において、ゲイである「彼」が「本当の自分」に

¹⁵ 黒古一夫 (2007)『村上春樹「喪失」の物語から「転換」の物語へ』勉誠出版 p256

¹⁶ 堀口真利子 (2013)「村上春樹『東京奇譚集』における偶然性——「品川猿」の眠りと覚醒」『相模国文』(40) 相模女子大学 pp82-83

衝突する社会的環境に不安を感じる。「東京」在住という都市生活者の特有なものというより、「彼」を悩ます社会的環境は、「彼」が「ありふれた現象」として生成した「奇譚」と同様に、普遍性を有するものだと考えられる。

「ハナレイ・ベイ」におけるサチが息子を亡くした苦痛を乗り越えないのは「自然の循環」を拒否するからだと言われる。「自然の可能性」を受け入れたサチは、自分が生活する空間である「東京」で若者の可能性に出会う。このように、サチにとって「東京」と同じように「自然の摂理」は身近なものだと言えよう。

「どこであれそれが見つかりそうな場所で」では、語り手の「私」が語るのは胡桃沢氏の失踪事件である。表面的な成功を手に入れた胡桃沢氏をめぐるのは「東京」が代表する高度的な資本主義社会であろう。現実世界に耐えきれないストレスから逃れようとする願望は「奇譚」を生み出す一因だと考えられる。

「日々移動する腎臓のかたちをした石」において、主人公の淳平の人生に影響を与えているのは、日常生活でも社会規範でもなく、父親の言葉をはじめとする家庭環境なのである。家庭環境に活性化された心の中の「何か」は容易に消えるものではない。

「品川猿」では、「名前忘れ」を治療しようとするみずきが受けたカウンセリングが示唆したように、「東京」の地下は「人間の心の深層＝無意識の世界」のメタファーだと看做される。家族、配偶者、同僚との関係に悩まないのは、みずきが「防衛的な姿勢」をとったからだと言われている。このように、外的環境からの影響を抑制する深層心理は窺える。

3. 各短編を繋ぐ要素

前節で述べたように、『東京奇譚集』において各短編の主人公は心の内面の問題を抱えている人物である。そして、個人の内面の問題は、主人公が生活している環境に関わっている。

普遍的にゲイに差別を示された環境に生きる「偶然の旅人」の「彼」

は、自身の不安や葛藤を打ち明けるすべがない。息子の死を乗り越えることのない環境にいる「ハナレイ・ベイ」のサチは、ハナレイの町に行って息子の死を弔うような儀式を 10 年以上続けている。

「どこであれそれが見つかりそうな場所で」において、胡桃沢氏が高度の資本主義社会という環境で溜まったストレスは「私」の語りからうかがえる。「日々移動する腎臓のかたちをした石」の淳平は実家を離れて新しい環境に移っても、父からの強迫観念から逃れることができない。話を聞いてくれる相手のいない環境に生きる「品川猿」のみずきは、十分に愛されないことによって形成された「心の闇」を打ち明けることができない。

このように、五つの短編に登場する主人公や物語の舞台などの設定は、一見して共通性が見当たらないように思われる。しかしながら、外部環境と個人の内面問題との相互作用は五つの短編を繋げる要素だと考えられる。要するに、主人公が生活している「東京」は、個人の内面の問題に作用する環境だと見做されよう。一方、『東京奇譚集』という題名のように、「奇譚＝心を癒やす出来事」が起きたのも「東京」である。こうして、「東京」のあらゆる可能性は『東京奇譚集』収録された五編に亘って表現されている。

また、「それぞれ結末は違ってはいるが、目指しているものは同じだ。それは、メタファーとしての『カミングアウト』だ」¹⁷と論じられているように、メタファーとしての「カミングアウト」を通して、主人公が抱えた心の内面の問題は公表されている。ここで注目したいのは、「カミングアウト」を語る「三人称語り」である。

確かに「偶然の旅人」は、冒頭に「僕＝村上はこの文章の筆者である」(p9)とあるように、一人称の語り手が語る「ある知人」(p16)という「彼」の物語である。しかし、「伝聞を間接話法で再現」¹⁸するものとして、基本的に三人称語りという形で成り立った作品だと

¹⁷ 宮脇俊文 (2021)「村上春樹『ハナレイ・ベイ』と戦後日本人の歴史認識」『成蹊大学経済経営論集』52(1) 成蹊大学経済経営学会 p49

¹⁸ 風丸良彦 (2007)『村上春樹短篇再読』みすず書房 p182

看做される。また、「どこであれそれが見つかりそうな場所で」はそれと同じように、「私」という一人称の語りによる作品である一方、語られたのは胡桃沢氏をめぐる失踪事件である。このように、『東京奇譚集』に収録される五つの短編における「主人公が生きる東京」なり「カミングアウト」なり、全て三人称語りに表現されたものだと考えられる。

2000年代に入って村上春樹小説には三人称語りの使用が目立つようになった。2000年に上梓された『神の子どもたちはみな踊る』は完全に三人称で構成される短編集である。『神の子どもたちはみな踊る』は上梓されている。そして、三人称語りがもたらした作風の変化について、村上春樹は次のように述べている。

視点を大きく散らしていくことによって、これまでにない新しい書き方ができたし、新しい作風のようなものがそこに生まれたと思うからだ¹⁹。

引用文から分かるように、一人称語りに対して、三人称は「視点を大きく散らしていく」と村上春樹が考えている。三人称のメリットについて、坂上秋也は以下のように指摘している。

単純に、一人称で記すことのメリットとして、読み手と人物との共感性を加速させることが挙げられる。いわば一人称小説の読者は主人公と共に小説世界への冒険を始めていくのだ。これが三人称になると、読者はいささか遠い視点から物語を眺めることになる²⁰。

デビューして以来「僕」が代表する一人称が有する共感性に対し

¹⁹ 村上春樹 (2003) 「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③ 短篇集Ⅱ』講談社 p272

²⁰ 坂上秋也 (2010) 「『浄化の物語』をながいながら——三人称・コミットメント・反サプリメント」『ユリイカ』42(15) 青土社 p143

て、大きく散らす視点で遠く眺める三人称がもたらしたのは客観性だと考えられる。そして、村上春樹が「その世界を一人称だけでしめくくることは、現実的にもうほとんど不可能になっていた」²¹と述べているように、「その世界」を描くため 2000 年以降の作品に三人称の使用は多くなったのである。「その世界」は「魂の新しい個人的な領域」²²だと村上春樹が説明している。

以上のように、三人称語りによって遠い視点から観察されたのは主人公の「個人的な領域」＝「無意識の世界」だと考えられる。五つの短編において、主人公たちはそれぞれ異なった環境に置かれて、「東京」に影響された程度も一概に言えないのである。しかし、普遍性のある社会環境、身近にある自然の摂理、高度的な資本主義社会、日常生活を凌駕した家庭環境、心の深層のメタファーとしての東京地下は、三人称語りによって主人公から客観化され観察できるようになったのではなかろうか。

外部環境と個人の内面問題との相互作用を描く際に、三人称語りでなければ、「東京」の可能性を到底表現できない。さらに言えば、三人称語りは各短編に描かれた世界と環境を際立った要素でありながら、五つの短編を繋ぐ表現手法だと言えよう。

4. おわりに

『東京奇譚集』は五つの短編を収録した短編小説集である。各短編において、語り手の人称、主人公の設定には多様性が示されている。多くの先行研究が指摘したように、「奇譚」は心の内面の諸問題に関わるものである。一方、「ハナレイ・ペイ」に言及された「戦争」は心の深層に作用していると論じられている。

『東京奇譚集』において、個人の内面に影響する外的要因は、題名の「東京」に帰結していると考えられる。「偶然の旅人」では、「東

²¹ 村上春樹 (2003)「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③ 短篇集Ⅱ』講談社 p272

²² 村上春樹 (2003)「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑦ 「約束された場所で」、『村上春樹、河合隼雄に会いに行く』講談社 p392

京」という都市を代表する記号を超えた普遍的な社会環境と「彼」との衝突は描かれている。

「ハナレイ・ベイ」は、息子の死に十年以上悩まされた母親の苦痛を語る作品である。「自然の摂理」は、息子の死が自然の循環に戻ったと受け入れたサチが生活する「都市＝東京」で現れている。

「どこであれそれが見つかりそうな場所で」は、「東京」が代表する高度的な資本主義社会という表面的な成功を謳歌する環境に苦しむ胡桃沢氏の失踪事件が中心としている。

「日々移動する腎臓のかたちをした石」は、父親に言われた言葉が「強迫観念」となって、それに悩まされた淳平の話である。父親との関係を断って故郷を後にし「東京」に訪れた淳平が依然として父の言葉につきまとわれたように、日常生活を凌駕した家庭環境は窺える。

「品川猿」は『東京奇譚集』において最も「奇想天外」とされる作品である。「名前忘れ」の治療で地下に潜り込んだみずきは人間の言葉がしゃべれる猿に出会ったからである。一方、それは、カウンセリングを通して自分の「無意識の世界」に降りたメタファーとも解釈される。こうして、東京の地下は心の深層の象徴だと看做されよう。

以上のように、各短編が示した、主人公の深層心理に関わる外的環境はいずれも異なっている。しかし、主人公の「心の癒やし」なり「カミングアウト」なり、成立したのは三人称語りによるものだと考えられる。なぜなら、三人称語りには一人称語りを持っていない遠い視点が有しているからである。客観的な視点を通して観察すると、主人公の内面と外的環境との相互作用が現前していると言えよう。

<付記>

本論文は、2022年11月19日に開催された「2022年度台湾日本語教育研究国際学術シンポジウム」での口頭発表「村上春樹『東京奇譚集』における世界と環境」を元に加筆・修正したものである。

テキスト

村上春樹（2005）『東京奇譚集』新潮社

参考文献

風丸良彦（2007）『村上春樹短篇再読』みすず書房

川本三郎（2006）『村上春樹論集成』若草書房

黒古一夫（2007）『村上春樹「喪失」の物語から「転換」の物語へ』
勉誠出版

坂上秋也（2010）「『浄化の物語』をながいながら——三人称・コミットメント・反サプリメント」『ユリイカ』42(15) 青土社

ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳（2006）『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』新潮社

重岡徹（2006）「村上春樹『東京奇譚集』論」『別府大学国語国文学』(48) 別府大学国語国文学会

堀口真利子（2013）「村上春樹『東京奇譚集』における偶然性——「品川猿」の眠りと覚醒」『相模国文』(40) 相模女子大学

宮脇俊文（2021）「村上春樹『ハナレイ・ベイ』と戦後日本人の歴史認識」『成蹊大学経済経営論集』52(1) 成蹊大学経済経営学会

村上春樹（2014）『女のいない男たち』文藝春秋

村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000③ 短篇集Ⅱ』
講談社

村上春樹（2003）「解題」『村上春樹全作品 1990～2000⑦ 「約束された場所で」、「村上春樹、河合隼雄に会いに行く」』講談社

村上春樹（2012）『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』文藝春秋

村上春樹・柴田元幸（2000）『翻訳夜話』文藝春秋

藪添隆一（2019）「村上春樹『ハナレイ・ベイ』—臨床心理学的一考察—」『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要』
（57）京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部

葉凌（2014）「村上春樹『東京奇譚集』論—『共時性』・『受容』と奇譚の生成—」『国語国文学研究』（49）熊本大学文学部国語国文学会